

十九世紀文学と科学文化

—— バルザックとフローベールを例に ——

菅 谷 憲 興

「文学と科学文化」といった一見漠然としたテーマ¹⁾をめぐって、今日はたして何がいえるであろうか。それも、まさに十九世紀文学の場合にそうであるように、現在の知見から見ると往々にして時代遅れになってしまった科学理論との関連を問われる時、どのように文学作品を読むことができるかというのは、必ずしも自明な問題ではない。同時代の知への参照を、作品が「文学性 *littérarité*」を獲得するうえで依拠せざるをえなかったいわば必要悪のようなもの、言い換えれば、作品のなかにある時代とともに減びていく部分とみなすのではなく、いかにそれ自体を肯定的な文脈において捉えることができるかというのは、文学研究にとって依然として困難な課題であり続けている。この小論においては、バルザックの『あら皮 *La Peau de chagrin*』(1831)とフローベールの『ブヴァールとペキュシェ *Bouvard et Pécuchet*』(1881)という、それぞれ十九世紀前半と後半を代表する二人の小説家の作品を取り上げることで、以上のような一般的な問いに対する考察の材料を提供してみたい。

ところで、まず指摘しておかなければならないのは、文学と科学的言説といったいわゆる「横断的」なアプローチも、十九世紀の言説の磁場という観点から見た場合、ごく当たり前の問題設定にすぎないということである。「学際的」といった形容詞が近年よく使われるが、これは少なくとも十九世紀の小説に関するかぎりには、ある意味ではアナクロニズムであるといえなくもない。というのも、バルザックにしる、フローベールにしる、あるいはブラにしる、本来その文学的野心は社会や世界をトータルに捉えようとするところにあるのであって、従って、小説世界の構築のために同時代の知の領域が絶えず参照されるのもなんら驚くべきことではない。いうならば、「学際的」という語自体が、知の細分化が進み、諸学問領域の間に決定的な垣根ができて以降の発想から出てきたものであり、純粋な「文学性」などという考えをいまだ持っていなかった十九世紀の小説を論

じるのに相応しいタームとは必ずしもいえないであろう。このことは、たとえフローベールが文学の自律性への志向において際立っており、しばしばその後の文学的前衛の先駆けとみなされるとしても、事情は変わらない。実際、「何についても書かれていない書物 *livre sur rien*²⁾」への憧れにもかわらず、『ボヴァリー夫人』(1857) から未完の遺作『ブヴァールとペキュシェ』まで、その作品には当時の社会に対する批判的なまなざしが色濃く反映されていることは否定しがたい事実である。

ちなみに、世界に対するトータルな関心ということは、文学の側からだけでなく、それ以外の知の諸領域についても十分に指摘できることである。たとえば、今では高度に細分化された専門知識を要求される医学もまた、少なくとも十九世紀のある時期までは、総合的に人間を把握しようという野心を抱いていたことは忘れてはならない。事実、十八世紀末から十九世紀半ば頃までの医学書のなかには、「哲学的 *philosophique*」という形容詞を含んだタイトルが数多く見られるのだが、このことはそれらの書物の著者たちが何を目指していたかをはっきり示しているといえよう。いくつか例を挙げると、ブイヨール、『医学哲学および臨床医学一般に関する試論』；ジャンドラン、『実践医学の哲学的論考』；ヴィレー、『哲学との関係における生理学』；マンヴィル・ド・ボンザン、『女性の哲学的・医学的記述』³⁾。これらはすべて、フローベールが『ブヴァールとペキュシェ』の第Ⅲ章を執筆するために読んだ医学書であるが、他にも有名な例としては、十九世紀初頭の医学界に君臨したピネルの『哲学的疾病記述学』や『精神病に関する医学的・哲学的論考』⁴⁾、あるいはゾラに大きな影響を与えたことで知られるリュカの『自然遺伝の哲学的・生理学的概論』⁵⁾などが挙げられよう。しかも、これらの医学者たちはたいていの場合、哲学的思考と医学的思考との関係について一言論じており、みずからの著作に技術的な専門書の枠を超えた、人間学としての射程を与えようとする意図を隠そうとしていない。おそらくこのような流れを決定的に断ち切ったのが、近代医学を確立したといわれるクロード・ベルナールということになる。その提唱した「実験医学」は、形而上学的な次元を徹底的に排除することにより、医学を現代的な意味での科学に仕立てあげたというのが定説になっている。にもかかわらず、ベルナールのいわばマニフェストともいえるべき『実験医学序説』(1865)が、おそらくは著者自身の意図に反して、ゾラの文学創作に無視しがたい影響を与えたことを考える時、この時代の文学的想像力が同時代の科学の発見に負っていたものの重要性を伺うこと

ができよう。

話を文学に戻すと、たとえば『ブヴァールとペキュシェ』の著者にとって、農学や化学、医学、地質学、さらには歴史学、宗教学、教育学といった、それこそ理系から文系にわたる諸学問分野の知見を自らの小説の内部に取り込むことは、二次的な作業であるどころか、作品の美学そのものと深くかかわるものである。千五百冊以上にも及ぶその膨大な文献調査は⁶⁾、細部の正確さを期すためといったリアリズムへの配慮で説明のつくものではなく、むしろ多種多様な知の言説の参照、もしくは端的に引用こそがその文学的企図の根幹をなすものだということは、作者自らが書簡のなかでこの小説を「一種の笑劇仕立ての批判的百科全書 *une espèce d'encyclopédie critique en farce*⁷⁾」と呼んでいることから明らかであろう。ここで注意すべきは、フローベールが「教育的・啓蒙的 *didactique*」という語ではなく、「批判的 *critique*」という語を使っていることだ。この語をあえて字義通りに受け取るならば、フローベールのこの奇妙な百科全書的小説は、同時代の諸科学に対して明白に「批判的=批評的」たらんとしたといえようか。やはり書簡のなかで用いられている表現によれば、「思想のコミック *comique d'idées*⁸⁾」こそが、フローベールがこの作品で試みたアイロニーの核心であり、ブヴァールとペキュシェの演じる喜劇は、フィクションの形を借りた「あらゆる現代思想の再検討⁹⁾」だということになる。あたかも小説という文学の一ジャンルに医学や地質学を根底的に批判する能力が備わっているかのようなこの過剰な野心は、現在の我々の目には、十九世紀の作家の単なる妄想とも映りかねないであろう。しかしながら、この時代の文学作品をいま読み返すに当たっては、本来それが他の知の領域との積極的な競合関係のなかに自らを位置付けていたということを忘れてはならないということは確認しておきたい。

同様のことはまた、バルザックの『あら皮』についても指摘することができよう。この作品のストーリーはいまさら紹介するまでもなからうが、主人公ラファエル・ド・ヴァランタンが骨董屋で魔法の「あら皮」を手に入れるところから物語が始まる。このあら皮はいわば人間の欲望のメタファーであり、持ち主の願いをすべて叶えてくれるかわりに、彼の生をその度に少しずつ、だが確実に奪っていくことになる。その結果として主人公は結核にかかるのであるが、激しい欲望が結核を引き起こすという設定が、当時のまさに紋切型をなぞっている点には注意しておきたい。ラファエルは自らの命を救うべく、最初は三人の科学者たち（博物学者ラヴリー

ユ、力学の専門家ブランシュット、化学者ジャフェ）にあら皮の収縮を止めてもらおうと試み、次に高名な三人の医師に病气そのものの治療を依頼するのだが、結局はすべて無駄骨に終わる。ちなみに、これらの科学者たちにはそれぞれ実在のモデルがあり、三人の医師に関していえば、有機体論者 organiste ブリッセはブルッセ Broussais を、生氣論者 vitaliste カメリスチュスはレカミエ Récamier を、折衷主義者 éclectique モーグルディはクロード・ベルナルの師として知られるマジエンディ Magendie を指しているといわれている¹⁰⁾。要するに、この小説における診察の場面は十九世紀前半の医学論争のパロディーとして読むことも可能であり、おそらく同時代の読者にとってはそのことはある程度明らかであっただろうと思われる¹¹⁾。

ところで、ここでとりわけ重要なのは、バルザックのテキストが内包する科学批判、ほとんどフローベールのとさえいえるそのアイロニーが、最終的に諸科学に対する包括的な位置を文学に与えているかに思われる点である。「諸科学の位置測定」と題された論文のなかでジャック・ネーフも指摘するように¹²⁾、バルザックのテキストは学問の諸領域の限界をあえて戯画的に描きだすことにより、それらの各々を知の総体のなかに位置づけるものでもある。物語のなかでは博物学、力学、化学、さらには医学の諸学説のどれ一つとして、「欲望」という人間の最も基本的な原理を解明することができない。バルザックの語り手によれば、博物学は分類し、力学は運動の法則を応用し、化学は分解するということになるのだが、それらの知のいずれもあら皮の不思議な力の前ではまったく無力である。また、医学界の大御所として登場する三人の医師も、お互いの理論を無益に戦わせたあげく、結局のところ、ラファエルという一人の病人のなかに金儲けの機会を認めるにすぎない。彼らの滑稽な医学論争を打ち切るのが、モーグルディによる次のような言葉だというのは、いかにもシニカルな結論だといえよう。「しかし、彼には二十万リーヴルの年金があるんだから、こういう偏執狂者はめったにいない。われわれとしては、それなりの見解は出しておくべきだよ¹³⁾。」見落としてはならないのは、科学に対するこの辛辣なアイロニーが、バルザックにおいては、決してニヒリズムへとつながるものではないことである。実際、『あら皮』のテキストは知の諸分野の限界を一つ一つ見定めながら、ほかならぬフィクションの力を肯定しているように思われる。科学的な知を逃れる「あら皮=欲望」という謎を、小説は少なくともその多面性において表象することができる。『人間喜

劇』の作者には、小説という表象形式への信頼のようなものがあることは間違いないだろう。もちろん、たとえば『人間喜劇』総序(1842)において表明されている類の野心、すなわちキュヴィエとジョフロワ・サンティレールとの論争に直接的なヒントを得て着想されたトータルな知としての小説というヴィジョンは、今となってはバルザックのテキストが含んでいる歴史的な不純物であり、あえて真剣に受け取るにはあたらぬという見方もできなくはない。とはいえ、この時代の多くのフィクションが諸科学に対して polemical な関係を結んでいたことには、やはり無視しがたい意味がある。もしもこのような次元を完全に捨象した場合、バルザックのテキストに固有の志向性が曖昧になるのみならず、そもそも過去のテキストが必然的にはらむ他者性を損なうことになるのはいうまでもない。

最後に、もう一度『ブヴァールとペキュシェ』に戻って、この知の言説の引用で織り上げられた小説を特徴づける独特のアイロニーを一瞥し、その内実を簡単に探ってみよう。次に引用するのは、第Ⅲ章の一節、二人の主人公が生理学の実験に取り組む場面である。

我々の体の表面から、絶えず微量の水蒸気が発散しているというのは本当だろうか？その証拠には、人間の体重は刻々減っているという。もし日々、こうやって不足する分を補い、また過剰な分を取り除けば、健康は完全な均衡を保つことになる。この法則の考案者であるサンクトリウスは、半世紀もの間、食物のみならず排泄物の重さまで毎日測定して、計算を記す時以外には休みも取らずに、ずっと自分の体重を量り続けたらしい。

彼らはサンクトリウスの真似をしようとした。だが、二人同時に秤に乗ることとはできないので、まずはペキュシェから始めた。

発汗の邪魔にならないよう、衣服を脱いだ。恥ずかしさを我慢して素っ裸になると、まるで円筒のような長い胴体、短い脚、扁平足、褐色の皮膚などをさらしながら、台座の上にじっとしている。そのそばでは、友人が椅子に座って、本を朗読していた。

学者たちの説によれば、体熱は筋肉の収縮によって産み出されるのだから、胸郭と骨盤肢〔注・解剖学用語で脚部のこと〕を動かせば、ぬるま湯の温度を上げることができるという。

ブヴァールは浴槽を探しに行った。そして準備万端整うと、温度計を手に、その中に入った。

蒸留器の残骸が部屋の奥の方に掃き集められて、薄暗がりの中にぼんやりと

した塊を描き出している。時々、ねずみが何かを齧る音が聞こえてくる。芳香植物の古い香りが立ち込めている。二人ともとても快適に感じながら、穏やかにお喋りをしていた。

そのうち、ブヴァールが少し寒気を感じた。

「手足を動かすんだ！」とペキュシェが言う。

ブヴァールがどんなに手足を動かしても、温度計の表示には何の変化もない。「いくらなんでも寒いぞ。」

「こっちだって暖かくはないさ」と、ペキュシェ自身もぶるぶる震えながら答えた。「とにかく、骨盤肢を動かせ！もっと動かすんだ！」

ブヴァールは腿を開き、脇腹をねじって、腹を揺らしながら、クジラのようにぜいぜい喘いだ。それから温度計を見たが、目盛りは依然として下がり続けている。「どうなってるんだい！ちゃんと動いているのに！」

「まだ十分じゃないんだ！」

そこで、再び体操を始める。

三時間もこうやって動いてから、もう一度温度計をつかんだ。

「何だって！十二度だと！ああ、もうやめだ！もう御免だね！」¹⁴⁾

ブヴァールとペキュシェのグロテスクな実験の経過を物語る途中で、短い描写が一段落挿入されていることにまずは注目したい。フローベールは人間の知的営みとしての科学を舞台に載せる際、しばしば自然や物の描写をそれとコントラストをなすように対置させることがある。「人間的なもの」とその外部にある世界という対照それ自体は、ごくありきたりの文学的手法に属するものだともいえるが、ここで指摘すべきは、フローベールにおいては、これらの描写が漠然とながら人称化されている点であろう。それも特定の視点を前提とする焦点化というよりは、むしろ曖昧な匿名の主体 on の視座から描かれたかのような室内の光景¹⁵⁾は、ブヴァールとペキュシェの意識的な知覚内容には必ずしも還元できない細部を含んでいる。そこで問題になるのは、「感性的なるもの le sensible」とでも呼ぶべき人称性の限りなく希薄な世界であり、物語の意味には回収されることのない微細な知覚や感覚である。たとえばこの場合には、それぞれ視覚（「ぼんやりとした塊」）、聴覚（「ねずみが何かを齧る音」）、嗅覚（「芳香植物の古い香り」）にかかわる要素が、物語の内部にいわば一瞬のエアポケットを作り出し、同時に二人の主人公の知への意志を宙吊りにすることによって、つかの間の幸福感を現出させている¹⁶⁾。こういった感性的なるもの

は、それ故、テキストのなかでは知の雑音に対する批判としても機能することになるわけだが、時に装飾的な要素とみなされもする描写が、フローベール作品においては、まさに小説に固有の認識論的な次元を構成するものであることは強調しておくべきだろう。ちなみに、この段落の冒頭に出てくる「蒸留器の残骸」とは、第Ⅱ章の最後にブヴァールとペキュシェが蒸留酒製造を企てて大失敗した名残であり、いうまでもなく、ここでは目下行われている生理学の実験の結果を予告する機能を帯びていることはいうまでもない。

ところで、この一節にかぎらず、ブヴァールとペキュシェは書物で読んだ理論や知識を、しばしば自分たちの身体を使って実演してみせる。真面目な知の言説に身振りを与え、科学を可視化することにより、そこに滑稽さが醸し出されるメカニズムこそ、フローベールが「思想のコミック」と呼んだものであろう。引用した生理学の実験に関しては、不感蒸散にかかわるペキュシェの実験、体熱についてのブヴァールの実験のいずれも、それぞれ複数の医学的なソースに基づいていることが明らかになっている¹⁷⁾。まさしく医学的言説のパッチワークから小説の言語が生み出されるわけだが、その生成過程を子細に検討してみると、フローベールがそれらの言説をとところどころ誇張しながら、虚構の物語を作り出していることが分かる。たとえば、ペキュシェの実験のモデルとなるサンクトリウスが「半世紀もの間」自分の体重を日夜量り続けたという記述は、引用の原典の一つにある「彼は体重のごく些細な変化をも測定するため、その人生の一部を秤にのって過ごした」という記述をふくらませたものである¹⁸⁾。こういった戯画化、時に極端な誇張を通じて、小説家は科学性への信仰を身振りのコミックへと還元していく。要するに、『ブヴァールとペキュシェ』における科学批判とは、人間の知の基本的なジェスチャー、たとえばこの場合には「測定する」という身振りに光を当てることで、それが必然的に帯びることになる滑稽さを浮き彫りにすることに存するのだといえよう。

『ブヴァールとペキュシェ』が執筆されたのは、1872年から作者の死の年である1880年まで。一方、先に述べたクロード・ベルナルの『実験医学序説』は1865年に出版されている。つまり近代科学としての医学は1870年代にはすでに新たな時代を迎えていたのであり、ゾラがこの流れを受けて、今では評判の悪い『実験小説論』を発表したのが1880年。最新の科学的意匠としての実験医学に即座に飛びついたゾラとは反対に、フローベールは『ブヴァールとペキュシェ』の準備のための資料調査の一環

としてベルナールを読みはしたものの、その革新的な意義はついに理解しないままだったと思われる。実際、『実験病理学講義¹⁾』について取られた読書ノートを見ても、そこでであろうじて小説家の関心を引いているのはいくつかの実験のグロテスクさといったものであり、『ブヴァール』の作者にとっては、実験医学とはつまるところ身振りのコミックの問題でしかなかったことが伺える。ところで、ここでもう一度最初に提示した問題に戻るなら、十九世紀の小説家によるこのようななかば無理解にもとづく科学批判を、それでは、現代の読者はどのように読むべきか。フローベールの遺作長編は、それこそドン・キホーテ的な企てにすぎないのであろうか。このおそらくは正解のない問いについて考えるに当たって、身振りという問題系は一つのヒントを与えてくれるように思われる。事実、個々の科学理論のもつ歴史的な制約を超えて、身振りの次元において知を問題化するというのは、文学が科学文化に対して取りうる有効な姿勢の一つではなかろうか。少なくとも、小説が知の諸領域をたばねるトータルな表象形式としていまだ構想されていた十九世紀のフィクションについて論じるうえで、このことは無視しがたい重要性を備えているはずだ。

注

- 1) 以下の論考は、2004年12月4日に東京大学先端科学技術研究センターにおいて行われたワークショップ「エミール・ゾラの自然主義と当時の科学文化」における発表をもとに、新たに書き直したものである。ワークショップを主催した東京大学教授の金森修氏に、この場を借りて感謝したい。
- 2) 1852年1月16日、ルイズ・コレ宛書簡 (G. Flaubert, *Correspondance*, édition de Jean Bruneau et Yvan Leclerc, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. II, 1980, p. 31).
- 3) Jean Bouillaud, *Essai sur la philosophie médicale et sur les généralités de la clinique médicale*, Paris, J. Rouvier et E. Le Bouvier, 1836 ; Augustin-Nicolas Gendrin, *Traité philosophique de médecine pratique*, Paris, G. Baillière, 1838-41, 3 vol. ; Julien Joseph Virey, *De la Physiologie dans ses rapports avec la philosophie*, Paris, J.-B. Baillière, 1844 ; Charles-François Menville de Ponsan, *Histoire philosophique et médicale de la femme*, 2^e édition, Paris, J.-B. Baillière et fils, 1858, 3 vol.
- 4) Philippe Pinel, *Nosographie philosophique, ou la méthode de l'analyse appliquée à la médecine*, Paris, Maradan, 1797, 2 vol. ; *Traité médico-philosophique sur l'aliénation mentale ou la manie*, Paris, Richard, Caille et Ravier, 1800.

- 5) Prosper Lucas, *Traité philosophique et physiologique de l'hérédité naturelle dans les états de santé et de maladie du système nerveux*, Paris, J. B. Baillière, 1847-1850, 2 vol.
- 6) 1880年1月24日, エドマ・ロジェ・デ・ジュネット宛書簡 (*Correspondance, op. cit.*, t. V, 2007, p. 796).
- 7) 1872年8月19日, エドマ・ロジェ・デ・ジュネット宛書簡 (*Ibid.*, t. IV, 1998, p. 559).
- 8) 1877年4月2日, エドマ・ロジェ・デ・ジュネット宛書簡 (*Ibid.*, t. V, p. 214).
- 9) 1879年12月16日, ガートルード・テナント宛書簡 (*Ibid.*, t. V, p. 767).
- 10) 「この博士が、有名なブリッセだった。有機体論者の指導者にして、カバニスやビシャの後継者であり、実証的で唯物論的な考え方の医者であり、人間というのは有限の存在で、もっぱらみずからの体の法則にしたがっているだけであって、その正常な状態や有害な異常はあきらかな原因によって説明される、と考えている人物だった。／ラファエルの答えを聞くと、ブリッセは黙って中背の男のほうを見た。[...] これが情熱と信念のひとカメリスチュス博士で、生氣論者の指導者にして、ファン・ヘルモントの抽象理論の詩的な擁護者であった。彼によると、人間の生命は高邁な原理にほかならず、説明しがたい現象であり、医者のメスなど歯牙にもかけず、外科医学をあざむき、薬学が処方する薬や、代数学の x や、解剖学の証明からのがれて、われわれの努力をもあざわらう現象にほかならない。[...] /口元に皮肉な笑いをただよわせていた三人目のひとは、モーグルディ博士だった。すぐれた知性の持ち主だが、懐疑的で、ひとを小馬鹿にしたようなところがあり、メスしか信じず、とても壮健なひとでさえ急死することがあると認める点ではブリッセと同じで、人間は死後もまだ生きられると認める点ではカメリスチュスに同調していた。どんな学説にも良いところがあると考えていたが、どの学説にも与せず、最良の医学理論は理論をまったくもたずに、事実だけにもとづくことだと主張していた」(バルザック, 『あら皮』, 小倉孝誠訳, 藤原書店, 2000年, p. 330 ; Balzac, *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, t. X, 1979, p. 257-258).
- 11) この点については、金森修, 『科学的思考の考古学』, 人文書院, 2004年, 第二部・第一章「医学的一元論者の肖像—医師プルセの栄光と凋落」を参照。
- 12) Jacques Neefs, « La localisation des sciences », *Balzac et La Peau de chagrin*, études réunies par Claude Duchet, SEDES, 1979, p. 129-142.
- 13) 『あら皮』, 前掲書, p. 338 (Balzac, *op. cit.*, p. 262).
- 14) Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, édition mise à jour de Stéphanie Dord-Crouslé, Flammarion, « GF », 2008, p. 114-116 ; 訳は拙訳による。

- 15) フランス語の原文は以下の通りである : « Les ruines de la distillerie balayées vers le fond de l'appartement dessinaient dans l'ombre un vague monticule. On entendait par intervalles le grignotement des souris ; une vieille odeur de plantes aromatiques s'exhalait — et se trouvant là fort bien, ils causaient avec sérénité » (*Bouvard et Pécuchet, op. cit.*, p. 115).
感性的なものと不定代名詞 on との関係については、別途検討が必要であろう。
- 16) この点については、以下の論文を参照のこと。Norioki Sugaya, « Les corps des savoirs — Les sciences médicales dans l'espace de la fiction », *Bouvard et Pécuchet : archives et interprétation*, textes réunis et présentés par Anne Herschberg Pierrot et Jacques Neefs, Éditions nouvelles Cécile Defaut, 2014, p. 103-121.
- 17) 体熱については、Nicolas-Philibert Adelon, *Physiologie de l'homme*, Paris, Compère jeune, 1823-24, 4 vol., および Michel Lévy, *Traité d'hygiène publique et privée*, Paris, J.-B. Baillière et fils, 1844-45, 2 vol. をフローベールは参考している。不感蒸散については、これら 2 冊に加えて、さらに以下の書物についての読書ノートが残されている。 *Dictionnaire des sciences médicales*, art. « Peau », Paris, C.-L.-F. Panckoucke, t. 39, 1819 ; Balthasar-Anthelme Richerand, *Nouveaux éléments de physiologie*, 8^e édition, Paris, Caille et Ravier, 1820, 2 vol. ; Bruno Béraud, 2^e édition, Paris, G. Baillière, 1856-57, 2 vol. ; Charles Daremberg, *Histoire des sciences médicales*, Paris, J.-B. Baillière et fils, 1870, 2 vol.
- 18) Ch. Daremberg, *op. cit.*, t. 2, p. 736.
- 19) Claude Bernard, *Leçons de pathologie expérimentale*, Paris, J.-B. Baillière et fils, 1872.